

『子不語』の鬼求代説話の顛末

——鬼が鬼を逐う——

中 野 清

はじめに

『子不語』（『新齊諧』・『續新齊諧』）に収録された「鬼求代説話」と考えられるものには、以下の十四則がある。

- ① 『蔡書生』 『子不語』 卷一。
- ② 『瓜棚下二鬼』 『子不語』 卷三。
- ③ 『鬼有三技過此鬼道乃窮』 『子不語』 卷四。
- ④ 『陳清恪公吹氣退氣』 『子不語』 卷四。
- ⑤ 『周若虛』 『子不語』 卷六。
- ⑥ 『釘鬼脫逃』 『子不語』 卷六。
- ⑦ 『朱十二』 『子不語』 卷八。
- ⑧ 『鬼爭替身人因得脱』 『子不語』 卷九。
- ⑨ 『柳如是爲厲』 『子不語』 卷十六。

⑩ 『鬼逐鬼』 『子不語』 卷十六。

⑪ 『縊死畏魄字』 『續新齊諧』 卷二。

⑫ 『打破鬼例』 『續新齊諧』 卷三。

⑬ 『拔鬼舌』 『續新齊諧』 卷四。

⑭ 『認鬼作妹』 『續新齊諧』 卷十。

このうち⑧については本誌第二十五集所載の拙論、⑨については本誌第二十六集所載の拙論で詳しく検討した。

⑬・④・⑦・⑥・③・①・⑫については本誌第二十七集所載の拙論で検討を加えた。

本稿は残る⑩・⑤・⑪・②・⑭の各則について、いささかの検討を加え、袁枚の「鬼求代觀（假にそういうものがあるとすれば）」を探ってみようという試みである。

なお引用原文は一括して「注」に掲げ、本文中には、書き

下し文と譯文を付したこともあり、書き下し文と梗概を付したのもある。分量の関係でこの點はご了承いただきたいと思う。また登場人物及び鬼のセリフの部分は白話が使われることが多く、訓讀にはなじまないのだが、強いて訓讀した點もご了承いただきたい。また小見出しの番號は、本誌二十七集所載の拙論と通し番號とする。

五、鬼が鬼を逐う

替身を求めてやって來た鬼を、替身と目された者の身内みうちの鬼が追ひ拂うというモチーフのものが三件ある。

⑤の『周若虛』・⑩の『鬼逐鬼』・⑪の『縊死鬼畏魄字』である。

⑤の『周若虛』は、題名だけでは何のことやら譯が解らないが、これは『子不語』・『續新齊諧』の各則に付された題名が、袁枚にとってのメモのようなものであり、袁枚自身がどの話か特定できれば良い、という付されかたをしているからである。

『周若虛』は人名であり、浙江省慈溪縣は袁枚の祖籍の地である。⁽¹⁾だから姓名だけで記憶が蘇る同郷人なのであろう。

『子不語』の鬼求代説話の顚末（中野）

慈溪の周若虛久しく場屋に困しみ、城外の謝家店に在りて教讀すること四十餘年なり。凡そ村内の長幼、業を受けざるなし。一日、晚膳の後に館に在りて獨坐するに、學生の馮某有り前に向ひ揖を作し、若虛を邀へて家に至らしめ、要事の相ひ懇ぜんとする有り。言ひ畢りて別れを告ぐるに、辭色の間、甚だ慘憺なるを覺ゆ。若虛馮某は已に死し、見る所の者は鬼に係ると憶ひ、覺へず大に驚きて、即ち其の家に詣る。馮某の父夢蘭は門外に在りて佇立す。見れば即ち挽留して小飲せしむ。若虛も亦た其の所以を道はず。家常を閒話す。覺えず漏三鼓に下り、家に回かへる能わざれば、夢蘭留めて樓上に宿せしむ。中間に在りて榻を設くるも、壁を間へだつるは即ち馮某の妻王氏の住む房なり。隱隱として哭聲あるに似たり。若虛燭を秉りて寐ねず。樓の梯上に青衣の婦人有るを見る。屢しばしば頭を伸し窺ひ探り、始め半面を露し、繼ぎて全身を現す。若虛呵して、何人ぞ、と問ふに、其の婦聲を厲はげまして曰く、周先生、此の時應まさ該に睡るべし、と。若虛曰く、我の睡ると睡らざると、汝と何をか干する、と。婦曰く、我は是れ何人なるも、先生と何をか干する、と。即ち披髮して血を漉ぎ、繩を持して奔り犯さんとす。若虛驚駭し倒れんと欲するに、忽ち背後に人有り手を用つ

中國詩文論叢 第二十八集

て扶持して、曰く、先生怕るるを休めよ。學生此に在りて保護せん、と。これを諦視するに、即ち已に故となるの馮生なり。隨ひて亦た見えず。若虛喊叫^{きり}べば、其の父夢蘭燭を持して樓に上る。若虛具^{ぐさ}に見る所を道ふ。夢蘭即ち媳婦王氏をして門を開かしめんとするも、杳として聲息無し。門を抉りて入れば、則ち身は已に樑上に懸かれり。若虛協同して解救するに、時を逾えて始めて蘇る。午前²に王氏と小姑と爭鬧し、翁に責罵せらるるに因り、短見生を輕んずれば、惡鬼機に乗じて至る。其の夫泉下に在りてこれを知り、故に援を若虛に求むるならん。

慈溪の周若虛は、ながいあいだ科擧に運がなかったので、慈溪縣の城外の謝家店で、四十年以上も塾を開いて教えていた。村内の老人から幼年に至るまで、彼の授業を受けなかったものはいないほどであった。ある日、夕飯の後、塾にひとりで坐っていると、學生の馮某がやって来て、お辭儀をし、若虛を彼の家にまねいて、重要なことで助けていただきたい、と言う。言い終わると、別れを告げるのだが、その聲音がなんとも悲慘なのである。若虛は、馮某はすでに死んでいるのではないか、いま現れたのは幽靈であろうかと思ひ、なんとなくぞつとしたが、すぐに彼の家に行つて

みた。馮某の父親、夢蘭が、門の外にひとりたたずんでいたが、若虛を見ると引き留めて酒を出した。若虛も訪ねてきた理由は特に話さずに、世間話をしていると、氣付かないうちに三鼓になっていた。もう家に歸るわけにもいかなかった。夢蘭は、若虛に二階に泊まってもらふことにした。まん中の部屋に長椅子が用意してあった。となりの部屋は馮某の妻、王氏の部屋である。泣き聲がかすかに聞こえるような氣がする。若虛は燈りを持ったまま、横にならずにいた。ふと見ると、階段にひとりの青い着物をきた婦人がいて、しよっちゅう首を伸ばして、様子をうかがっているようである。はじめは顔の半分しか見えなかったが、ついで全身が現れた。若虛は、「何ものだ」と怒鳴った。その女もすごい聲で、「周先生。今は寝ていなければいい時間ですよ」と言う。若虛が、「わしが寝ていようがいまいが、お前になんの關係があるんだ」と言うと、女は、「私は何ものか。そんなこと先生になんの關係があるの」と言い、そのとたんに髪をふり亂し、血を滴らせ、繩を持ってこちちに向かってくる。若虛はびっくりして倒れそうになると、ふと背後に人がいて、手で若虛を支え、「先生恐がらないでください、學生がここにいて、お守りします」と

言う。よく見ると、なんとすでに死んだはずの馮であつたが、その姿はすぐに消えた。若虚は大聲をあげて、馮の父を呼んだ。夢蘭が燈りを持って上がってきたので、若虚は見たことをすべて話した。夢蘭はすぐに嫁の王氏に、戸を開けるように叫んだが、部屋の中は、杳として氣配もない。戸をこじ開けて入ってみると、彼女はもう梁にぶら下がっていた。若虚と夢蘭は協力して、王氏を助け下ろし介抱した。一時ほどたつてやっと息を吹き返した。聞いてみると、午前中に王氏と小姑とが言い争いをし、ご隠居の祖父にきびしく注意され、短慮のあまり命を粗末にし、悪い幽霊がその機に乗じてこんなことになつたらしい。しかしその夫が、黄泉の國でそれを知り、若虚に助けを求めたということなのである。

周若虚の學生である馮某が、自分の妻を求代鬼から守るために、周若虚の加勢を求めるという話である。馮某は鬼ではあつても、求代鬼に一人で向かう力がない、という事なのであろう。周若虚は塾師であるから、言うまでもなく儒家でありまた人格者である。人としての力を借りたということか。

次の⑩の『鬼逐鬼』は、題名がほぼ内容を暗示している。

『子不語』の鬼求代説話の顛末（中野）

桐城の左秀才某は其の妻張氏と伉儷甚だ篤し。張病みて卒するも、左は相ひ離るるに忍びず、終日棺に伴ひて寝ねたり。七月十五日其の家孟蘭の會を作す。家人俱に外に在りて佛に禮し醮を設く。秀才獨り妻の棺に伴ひて書を看る。忽ち陰風一陣あり。縊死鬼の披髮流血し繩を拖きて至る有りて、直ちに秀才を犯さんとす。秀才惶急し、棺を拍ちて呼びて曰く、妹妹我を救へ、と。其の妻竟に勃然として棺を掀げて起ち、罵りて曰く、惡鬼敢て無禮にも我が郎君を犯さんとするか、と。臂を揮ひて鬼を打てば、鬼踉蹌として逃れ出づ。妻秀才に謂はく、汝は癡なり。夫婦の鍾情一に是に至るか。汝の福薄きに緣りての故に惡鬼敢て相ひ犯さんとす。盍ぞ我と共に歸し去りて人身に投じて、再び偕老の計を作さざるか。秀才唯唯たり。妻仍りて棺に入りて臥せり。秀才家人を呼びて之を視しむるに、棺の釘は數重なるも皆な斷たれ、妻の裙は猶は半幅を棺縫の中に夾めり。年を逾へずして秀才も亦た卒す。

桐城の左秀才夫婦は仲がよかった。左は妻に死なれて、一日中棺の脇にいた。孟蘭盆會のとき、縊死鬼が求代にあらわれる。秀才が妻の棺をたたいて助けを求めると、妻の鬼が棺から出てきて縊鬼を撃退する。こんなに深い愛情を持ってく

れるのならば、あなたは福分が薄いことから、私と一緒にもう一度、生まれ變わつて偕に老いる計畫を立てましよう、と言つて棺にもどる。その年のうちに秀才も死ぬ。

左の妻張氏は鬼としての力が、⑤の馮某よりも強烈で、特に加勢を必要としていない。

⑤と⑩はともに配偶者の鬼が、その連れあいを守るという話である。⑤の馮某は弱い男で、師匠の助けを借り、妻を守る。⑩の張氏は強い女で、獨力でその夫を守る。

⑪の『縊鬼畏魄字』は、かなりひねつたものである。

瀬江に二土有り相ひ友たること善し。甲は年長にして性は凝重なり。乙の妻は甲を呼ぶに伯を以てし、相ひ見ること家人の如し。俄にして乙の妻死し、續いで少艾を娶る。

甲は嫌を以て往かず、蹤跡久しく疏なり。一日暮に雨ふり、避けて茶亭宿る。乙の家に距たること二里許り。忽ち乙の前妻の至るを見る。甲心動じ色變ず。乙の妻曰く、伯懼るる無かれ。妾は方に伯に求むる有り。吾が夫の後に娶る者家事に勤めて、善く妾の子女を撫するも、今日微に反目あり、縊鬼有りてこれを知り、將に縊に投ぜしめんとす。此の人若し死せば、吾が家は蕩然たらん。一たび往きて吾が夫を救はんことを祈る、と。甲曰く、吾は師巫に非ず、往

くも何ぞ能く鬼を驅らん。汝冥中に在るに、反つて禁ずる能はざるか。乙妻曰く、是の惡戾の氣は、妾焉んぞ敢へて敵せん。伯の一たび往くを須つ、と。甲已むを得ずこれに隨ふ。行きて門に至れば、門已に閉ず。乙妻已に旁隙より入りて戸を啓くに、何れの時か知らず已に燈燃えたり。

一椅を移して中庭に至り甲に告げて曰く、伯此に坐せ。麗人の來りて道を假りんとする者有れば、即ち縊鬼なり。堅く坐して動く勿れ。彼れ自ら敢て前まざらん。妾當に座の後に在りてこれを視ん、と。少頃にして、果して一女の手に紅帕を執り笑を含むを見る。婉言して曰く、妾事有りて前まんと欲す、盍ぞ少か退かざる、と。甲應へざるに、女乃ち卻つて退く。乙妻曰く、彼去るも當に復た來たるべし。來れば則ち意態甚だ惡からんも、伯怖るる勿れ、と。須臾にして女至りて曰く、君胡ぞ避けざる、と。甲仍ほ睬せず。女忽ち披髮し嚙血して突して甲前に至る。甲聲を厲ませてこれを叱するに、鬼も亦た滅す。乙妻曰く、惜いかな、伯呼ぶ勿れ。但だ左手の兩指を以て一の魄の字を寫し、これを指して地に入れよ。彼一たび入れば、出づる能はず。今暫く滅すと雖も、彼れ必ず暗かに吾が家へ往かん。伯急ぎ吾が夫の寢門を叩くべし、と。甲は言の如くす。乙夢中よ

り其の聲を辨じて曰く、兄何ぞ暮夜に此に至れる、と。曰く、君我れに問ふ勿れ。且らく問ふ尊嫂は安にか在る、と。乙牀を繞りこれを捫るも見えず。急ぎ門を啓きて甲を呼び入らしむ。これを燭すに、乃ち牀後に懸れり。共に其の縊るるを解き、灌ぐに湯を以てするに、徐徐にして蘇る。乙妻に問ふ、何をか苦しみて死を尋むる、と。妻曰く、吾れ初めは知らず。恍惚として婦人有り。我れを邀へて園中に至り、尋いで片時玩ぶに、圓窗の若き者有るを見る。我をして引領ひてこれに望ましむ。我が頭窗に入るに、逐に出づる能はず、と。甲因りて具さに遇ふ所を道ふ。而して乙の前妻は杳として跡無し。江の西の堪輿陸在田は甲と善し。其の事を言う。

瀬江は瀬水、溧水の別名である。かつて袁枚が知縣に任ぜられた溧水縣のこと。甲乙二人の讀書人が仲良くしていた。甲は年長で重々しいひとがらだった。乙の妻は、甲を伯と呼び家族同様にしていた。急に乙の妻が死んで、若い美人を娶ったので、甲は何となく嫌になりだんだん付き合ひも減っていた。ある日、日暮れ時に雨が降ったので、甲は乙の家から二里ばかりの所の、茶畑の休み所に雨宿りをした。そこに乙の前妻が現れてお願ひがあると言う。後妻になった者は

『子不語』の鬼求代説話の顛末（中野）

家を好く治めているが、今日もめ事があった。それを縊鬼が知り替身として首を括らせようとしている。この後妻がいなくなれば家はつぶれる。だから助けてくれ、と言う。甲はやむを得ず乙の家に同道した。椅子を中庭に置いてそこに坐り、道を譲れと言ってくる者がいればそれが縊鬼だから、動かないようにと言ひ含める。やってきた求代鬼は取り合わないでいると歸るが、次にはすさまじい形相でやってきたので、甲は思わず大聲をだし、鬼は消える。前妻の鬼が「惜しかった。聲を出さないで、左手の二本の指で『魄』の一字を書いて、それを指さして地に入れば、彼は地に入って出ることができない」という。そして、乙の寢室に急げと言う。乙を起こして燈りをつけると、果たして乙の後妻が首をつっていたので救助した。江の西の風水師陸在田は甲と仲良かった。この話をしてくれた、というのである。

この話を最後まで讀ませるのは、意外性であろう。「俄にして乙の妻死し、續いで少文を娶る。甲は嫌を以て往かず、蹤跡久しく疏なり」のあたりまで讀んで、「亡妻嫉妬」の話だと思ふ。

しかし前妻の鬼が現れて、「吾が夫の後に娶る者家事に勤めて、善く妾の子女を撫するも、今日微に反目あり、縊鬼有

りてこれを知り、將に纒に投ぜしめんとす。此の人若し死せば、吾が家は蕩然たらん」というところまできて、はじめて「前妻が後妻を守る」という世に稀なる美談であることがわかる。

鬼が直線的にしか進むことができない點について、鬼の通路上に椅子を置き甲を坐らせ、一度目の鬼の侵入を阻む。二度目は惡鬼の形相に驚いた甲が、聲をあげて鬼が消える。

「惜しかった。聲を出さないで、左手の二本の指で『魄』の一字を書いて、それを指さして地に入れば、彼は地に入っていることができない」という部分は、實行されたわけではないので、今ひとつよくわからない部分である。

だいたい「魄」の字を云々などということは、甲が知るはずもないことである。後から言われてもできるはずはない。

珍しいことに最後に陸在田という、甲と親しかった堪輿（風水師）から聞いた話だと記している。

要するにひねった話だが、人から聞いた話だからあまり脚色を加えてはいないということを暗示しているのだろう。

しかし、ここからは臆説だが、そもそも風水などは信じないと公言している袁枚が、風水師から聞いた話をそのまま記すであろうか。或いは、風水師から聞いたのは「魄」の字を

書いてという部分だけなのではなからうか。内容が理解しにくく、呪術的な部分はここだけであるというのも、傍證になるのではなからうか。

ここまでが「身内を求代鬼から守る鬼」である。

六、求代鬼を装って供養を求める

②の『瓜棚下二鬼』は、求代鬼だと名乗る鬼が、實は供養を求めていたのだが、という複雑な話である。

海陽の邑中の劉氏の女、夏日瓜棚の下に在りて刺繡す。

薄暮家人蒲席を鋪きて涼を招くに、女忽ち座間に於て影を顧みて絮語す。衆其の誕なるを怪しみこれを呵す。乃ち大聲に曰く、唉我れ豈に若が女おんなならんや。我れは某村の某の婦なり。氣忿りて縊死して多年、替人を得んと欲するが故に此に在り、と。語り畢りて大に笑ひ、帶を擧げて自ら其の頸を勒せんとす。闔室盡く驚き、米豆を取りてこれを厭勝せんとするも退かず。乃ち哀求して曰く、我が女年年他人の爲に金線を壓し、錢を取りて米に易ふるも、家貧なること憐むべし。汝と素より冤無ければ、幸はくは相ひ捨てよ。然らずんば、天師將に至らんとす。我當に往きて訴ふべし、と。鬼懼れて曰く、人を嚇す。人を嚇す。然りと雖

ども、我は以て虚しく返るべからず。當に以て我に送る所を思ふべし、と。衆曰く、香と楮を供するは何如、と。

應へず。曰く、斗酒と只雞を加ふるは何如、と。乃ち喜色有り且つこれに頷く。其の言の如くするに、女果して醒む。

未だ三日ならずして、家人方に相ひ慶ぶに、女の衣袖忽ち

又た翩舞し、憤語して曰く、汝等此の如く我を薄待す。回想するに休むを干むるを肯へんぜず。仍りて討替を須めん、

と。更に惡狀を作し、帶を以て頸に套す。衆其の音を察するに、前鬼に類ず。正に驚き疑ふ間に、俄にして瓜棚の下

に綽綽として履の響くを聞く。仍りて女在りて口に叱して曰く、鬼の婢よ。我姓名を冒し、來りて錢鏹を詐らんとす。

辱没なること煞人なり。亟すまやかに去れ。亟すまやかに去れ。然らずんば、我將に汝を城隍神に訟へんとす、と。又た女の家を

勞り問ひて、此の無賴鬼を怕るる勿れ。我れ此に在れば、他敢て厲を爲さず、と。言ひ畢るに、其の女の頬暈は紅潮

として、狀は羞ぢて縮する者の若し。食頃にして、兩鬼寂然として皆な退く。次日、其の女舊に依りて鏡に臨む。其の

事を詢たづぬるも、杳然として夢の如し。

老人李某は海陽の人なり。薄暮邑中自り家に還り、腰に重物を纏ふを覺ゆるに、解きて視るも有る無ければ、勉め

『子不語』の鬼求代説話の顛末（中野）

荷ひて歸る。時已に月上れば、家人扉を叩くの聲を聞き、

走りて相ひ安を問ふも、老人目を瞪きて言ふ無く、爲に酒

脯を設くるも、亦た食はず。愈いよ益ますこれを怪しむ。

既にして布を取ることに幅許、樑間に懸けて縊狀を作し、曰

く、余は縊死鬼なり。今汝が翁と交代を作す、と。衆驚き

詰るに前因を以てす。曰く、余は李氏たりて城中に棲泊す。

曾て某家に至り其の女に瓜棚の下に祟る。其の家中の哀求

するに因り、我も亦た伊女の婉弱なるを念ひ、是を以て捨て去り、別に替代を尋ねんとす。奔りて城門に及ぶに、

二大人有りて司管すること甚だ嚴なれば、敢て走過せず。此を以て日日苦みを受くるは、一言にして盡し難し、と。

衆家人曰く、城門の大人既然にして攔阻するに、汝今日何ぞ能く復た來る、と。乃ち嘻嘻として笑ひて曰く、此れ實

に大巧事なり。今早郷人糞桶を以て門の側に寄すれば、大人は其の臭きを惡み、兩つながら相ひ謂ひて曰く、昨宵の

雨歇みて、城頭の山色當に佳なるべし。盍ぞ一たび憑りて眺めざるか、と。遂に約して伴に山に登りて去れり。余間

に乗じて城より出づるを得たり。汝が翁の歸るに遇ひ、他の腰帶の間に附し、其の負ひ荷ふを蒙る。生を得るに急な

れば、故に仍ほ重きを相ひ借りんと欲するのみ、と。衆其

中國詩文論叢 第二十八集

の言の軟なるを聞くに、情を以て動かしむ可き者に似れば、乃ち哀求して曰く、翁年老いて、墓木已に拱す。你弱女に忍びずして、寧獨ぞ禿翁に甘心する。如し哀憐を蒙むらば、當に名僧を延きて法事を修むべし。你をして天人の境界に生まれしむるは何如、と。鬼手を拍ち喜びて曰く、我れ前に瓜棚の下に在りて、原と彼を挽きて此の功德を作さしめんと欲するも、其の家の貧なるを視て、是を以て言ふ勿し。今衆居士既に能く大願力を發す、餘又は何を求めん。然りと雖も、世人鬼を哄ふの伎倆に慣作れば、惟だ居士に求む此の言を忘る勿れ、と。衆唯唯たり。鬼即ち頂禮の狀を作す。食頃にして、老人已に起ち水漿を索めて飲む。翌日、廣く僧衆を延き七日の道場を作さしむ。瓜棚の下此れより清淨なり。

海陽（江蘇省常熟の北）の劉氏の娘が瓜棚の下で刺繍をしていて、鬼に取りつかれる。自ら「替人を得んと欲す」と言うのだが、結局、お供え物をあげることで話をつける。三日もたたずにまた鬼に取りつかれる。聲が前の鬼とは違うようだと思っていると、前の鬼がやってきて、大いに罵り、追いつ。

海陽の老人李某は、何かが腰に纏いついたような重みを覺

えるが、ともかく家に歸る。しばらくして布を梁にかけて首をつる格好をして、縊死鬼だと言う。話し續けるうち、結局、名僧を招いて七日間の法事を營むことで決着する。

自ら「我れは某村の某の婦なり。氣忿りて縊死して多年、替人を得んと欲するが故に此に在り」と、名乗りをあげて登場する求代鬼というのは、考えられない存在である。

結果として原因不明の首つり自殺があった、というのが、成功した求代なのである。

二軒目では、「余は縊死鬼なり。今汝が翁と交代を作す」と、また名乗りをあげる。

そしてひたすら語る。

「糞桶」の臭さに嫌氣がさした門神が、「昨宵の雨歌みて、城頭の山色當に佳なるべし。盍ぞ一たび憑りて眺めざるか」と語り合い、「逐に約して伴に山に登りて去れり」と、自分が城門を如何に通過したかを説明する。

そして、法事の話になると、「鬼手を拍ち喜びて曰く、我れ前に瓜棚の下に在りて、原と彼を挽きて此の功德を作さしめんと欲するも、其の家の貧なるを視て、是を以て言ふ勿し」と手の内を明かし、「今衆居士既に能く大願力を發す」などと、老人の家族を「居士」とおだてあげ、「鬼即ち頂禮

の状を作す」という大サービスまでしている。

このセリフの部分が無類のおもしろさで、すぐれた創作である。

劉氏の娘に、二度目に祟る鬼を追い拂うという部分が、や「鬼が鬼を逐う」にちかいが、ともに本當の求代鬼ではなく、供養や法事をゆすり取ろうという鬼であるようだ。

七、賄賂で妨害をやめさせる

⑭の『認鬼作妹』は、求代に成功する唯一の話である。

浙の藩司の更夫陳某は、飲むを喜びて膽最も豪なり。一夕、垣牆の外を巡伺す。時に三鼓にして月甚だ明かなり。一婦人の年十八九にして、容貌頗る麗しきを見る。陳念ふに官衙の禁地なれば、必ず私に約する者無からん。心に人に非ずと知り、姑くこれに戯れんとし、乃ち往きて其の腕を握りて曰く、子夜行くは、佳耦を覓むる無きを得んや。我若の壻と爲るは何如、と。婦曰く、我は人に非ずして乃ち縊鬼なり、と。其の貌を變ずること甚だ瘴惡なり。陳曰く、我鬼は皆な能く貌を改むと聞く。卿は即ち陋劣なるも、我嫌はざるなり、と。鬼奈ともする無くして乃ち曰く、子姑く我を捨つれば、錢十五千有り子に與ふるは何如。陳

『子不語』の鬼求代説話の顛末（中野）

問ふ、錢は何く従り得ん、と。鬼曰く、薦橋の某錢莊に女有り、我れ明る日往きてこれに祟らん。子我を認め妹と作す須し。我若し子に錢十五千を與へば、其の病即ち愈ゆと教へん。但だ子錢を得し後に、我此に在りて一二の事に勾當すれば、自後再び我を阻むを得る母れ、と。陳これに諾するに、鬼乃ち去る。明る日の午後、果して人の陳を來訪する有りて、且つ曰く、汝が妹は鬼爲ること太だ良からず。昨日主人の女出でて戲を見る。歸りて其の祟る所と爲る。百計解を求むるも、必ず其の兄を尋ねんと欲す。來れば乃ち去らんと云ふ。故に子を招き往かん、と。陳乃ち同に往き、門に入るに、鬼即ち内に在りて曰く、吾が兄至れり、と。大に慟して趨り出づ。陳も亦た伴り泣きて、相ひ抱きて慟す。已にして鬼曰く、吾が兄は貧にして、以って生を爲す無し。汝が家は富なれば、吾が兄に錢十五千を予へ生計を作さしむるを須ちて、我當に去るべし、と。店の主人已むを得ず、數の如くにこれに予ふるに、女の疾果して愈えたり。陳錢を得て歸るに、三日ならずして、廨中に果して婦人の縊死する者有るを聞く。蓋し鬼代を求むるも、陳のこれを阻むを恐れ、故に賄を行ふのみ。

浙江布政司の夜回り陳某は、酒好きで大膽だった。月の明

中國詩文論叢 第二十八集

るい三更に立入禁止の役所内に美女がいる。まず人ではないと見當をつけ、からかいに行く。女は自分は縊鬼だと告げ、すさまじい顔つきに變ったが、陳は取り合わずに迫る。女はどうしようもなくなつて、私を放つておいてくれるなら錢十五貫をお前にやろう、ともちかける。錢莊の娘に崇つて十五貫を貰えるようにするから、兄だということにして、鎮めて禮金を取れというのである。次の日、錢莊から迎えがきて、崇っている妹をなんとかしてくれという。同行して、話を合わせ、鎮めて禮金十五貫を手に入れる。そのあと三日もたないうちに、役所内で縊死したものがあつて、求代鬼が賄賂を使つたのだということがわかる。

酒好きで膽の太い陳某が、夜の見回りで、人がいるはずのない役所の敷地で女を見かける。人がいるはずがないところにいるのだから、人ではない鬼だという見當で、からかいに行くと果たして鬼であつた。悪鬼の形相も、まったく意に介せずにからかひ續ける。困り切つた鬼が、金が欲しくないかともちかける。求代の妨害を賄賂で封ずるという、まことに意外な展開で、すぐれた短篇小説になっている。

陳某が鬼の兄のふりをして、錢莊で金を貰つた後、風の便りによつた感じで、女性の縊死者が役所に出たので、どう

やら求代に成功したようだ、という落ちになる。

結語

本誌第二十七集所載の拙論で論じた部分の、

「一、簡単に撃退する」の『拔舌鬼』は醉餘の夢裏のといふ話であり、加工を加えず、聞き書きのままである。あまりに單純な話なので、脚色しようがないのであろう。

「二、吹き消す」の『陳清恪公吹氣退氣』は、陰の氣に陽の氣が勝つはずだといふ、理の勝利である。

「三、暴力的に撃退を試みる」の『朱十二』では、朱は結局死ぬことになるし、『釘鬼脱逃』では、鬼に逃げられていく。

「四、論破する」の『鬼有三技過此鬼道乃窮』と『蔡書生』はともに理を以て縊鬼を論破するものだし、『打破鬼例』は單なる習慣による求代を非とする論陣をはる。まさに懷疑主義の合理主義である。

ここまでを要するに、人が暴力的に求代鬼を追い拂おうとしても、結局は不可能であるといふことをいつている。

理を以て吹き消すか、或いは理を以て論破するといふ、人の「理」のみが、人が鬼に勝るもの、といふ考え方である。

本稿の、

「五、鬼が鬼を逐う」の、『周若虛』は、自分の妻を求代鬼から守ろうという馮某の鬼が、力量不足で周若虛の力を借りる。

『鬼逐鬼』は、妻の鬼が夫を求代鬼から守る。

『縊死鬼畏魄字』は、乙の前妻の鬼が、後妻を求代鬼から守るために、甲の力を借りるという話である。

人の力を借りる場合もあるが、基本的には「鬼が鬼を逐う」ものである。

「六、求代鬼を装って供養を求める」の『瓜棚下二鬼』は、求代鬼を装った、供養や法事を求める鬼の話で、嚴密には「求代妨害説話」とは言えないであろう。

「七、賄賂で妨害をやめさせる」の『認鬼作妹』は、暴力的求代妨害にちかい話だが、鬼のほうに折れて賄賂を使い、求代に成功する。

これを要するに、人が鬼の求代を妨害するのは、暴力ではできず、理によるしかない。鬼が鬼の求代を妨害することは不可能ではないが、それぞれの鬼の力量で、人の助けを借りることもある、ということになるだろう。

登場人物の名前と、その事件の起きた土地の名前だけを入

『子不語』の鬼求代説話の顛末（中野）

れ替えただけの、凡百の鬼求代説話は確かに多い。

しかし、少なくとも子不語の鬼求代説話は、「同工異曲・大同小異」のものはない。周到な筋立て、すぐれた描寫、ユーモラスなセリフなど、短篇小説としての条件をすべて備えた見事な創作である。

【注】

(1) 袁枚が生まれ育ったのは浙江の錢塘縣（現在の杭州市）だが、祖籍は慈溪であり、慈溪縣に祖先の祠堂があった。例えば、『到西湖住七日即渡江遊四明山赴克太守之招』（『小倉山房詩集』卷三十六）に、

路過慈溪水竹村、祠堂一拜最消魂。

とあり、その自注に、「五代祖察院之槐眉公有祠堂。余入翰林、香亭成進士扁額俱存（五代の祖察院の槐眉公に祠堂有り。余は翰林に入り、香亭は進士と成るの扁額は俱に存す）」とある。袁枚の高祖袁槐眉は明の崇禎朝の侍御史。

(2) 原文は以下のとおり。

慈溪周若虛久困場屋、在城外謝家店教讀四十餘年。凡村內長幼、靡不受業。一日、晚膳後在館獨坐、有學生馮某向前作揖、邀若虛至家、有要事相懇。言畢告別、辭色之間、甚覺慘惻。若虛憶馮某已死、所見者係鬼、不覺大驚、即詣其家。馮某之父夢蘭在門外佇立。見即挽留小飲。若虛亦不道其所以。

中國詩文論叢 第二十八集

閒話家常。不覺漏下三鼓、不能回家、夢蘭留宿樓上。在中間設榻、閒壁即馮某之妻王氏住房。隱隱似有哭聲。若虛秉燭不寐。見樓梯上有青衣婦人。屢屢伸頭窺探、始露半面、繼現全身。若虛呵問、何人。其婦厲聲曰、周先生、此時應該睡矣。若虛曰、我睡與不睡、與汝何干。婦曰、我是何人、與先生何干。即披髮瀝血、持繩奔犯。若虛驚駭欲倒、忽背後有人用手扶持、曰、先生休怕、學生在此保護。諦視之、即已故之馮生也。隨亦不見。若虛喊叫、其父夢蘭持燭上樓。若虛具道所見。夢蘭即叫媳婦王氏開門、杳無聲息。挾門入、則身已懸樑上矣。若虛協同解救、逾時始蘇。因午前王氏與小姑爭鬧、被翁責罵、短見輕生、惡鬼乘機而至。其夫在泉下知之、故求援於若虛。

『周若虛』『子不語』卷六

(3) 原文は以下のとおり。

桐城左秀才某與其妻張氏伉儷甚篤。張病卒、左不忍相離、終日伴棺而寢。七月十五日其家作盂蘭之會。家人俱在外禮佛設醮。秀才獨伴妻棺看書。忽陰風一陣。有縊死鬼披髮流血拖繩而至、直犯秀才。秀才惶急、拍棺呼曰、妹妹救我。其妻竟勃然掀棺而起、罵曰、惡鬼敢無禮犯我郎君耶。揮臂打鬼、鬼踉蹌逃出。妻謂秀才、汝癡矣。夫婦鍾情一至於此耶。緣汝福薄故惡鬼敢於相犯。盍同我歸去投人身、再作偕老計耶。秀才唯唯。妻仍入棺臥矣。秀才呼家人視之、棺釘數重皆斷、妻之裙猶夾半幅於棺縫中也。不逾年秀才亦卒。

『鬼逐鬼』『子不語』卷十六

(4) 原文は以下のとおり。

瀨江有二士相友善。甲年長而性凝重。乙妻呼甲以伯、相見如家人。俄乙妻死、續娶少艾。甲以嫌不往、蹤跡久疏。一日暮雨、避宿茶亭。距乙家二里許。忽見乙前妻至。甲心動色變。乙妻曰、伯無懼。妾方有求於伯。吾夫後娶者勤于家事、善撫妾子女、今日微反目、有縊鬼知之、將令投繯。此人若死、吾家蕩然矣。祈一往救吾夫。甲曰、吾非師巫、往何能驅鬼。汝在冥中、反不能禁耶。乙妻曰、是惡戾之氣、妾焉敢敵。須伯一往。甲不得已隨之。行至門、門已閉矣。乙妻已從旁隙入啓戶、不知何時已燃燈矣。移一椅至中庭告甲曰、伯坐此。有麗人來假道者、即縊鬼也。堅坐勿動。彼自不敢前。妾當在座後視之。少頃、果見一女手執紅帕含笑。婉言曰、妾有事欲前、盍少退。甲不應、女乃卻退。乙妻曰、彼去當復來。來則意態甚惡、伯勿怖也。須臾女至曰、君胡不避。甲仍不睬。女忽披髮噴血突至甲前。甲厲聲叱之、鬼亦滅。乙妻曰、惜哉、伯勿呼。但以左手兩指寫一魄字、指之入地。彼一入、不能出矣。今雖暫滅、彼必暗往吾家。伯可急叩吾夫寢門。甲如言。乙從夢中辨其聲曰、兄何暮夜至此。曰、君勿問我。且問尊嫂安在。乙繞牀捫之不見。急啓門呼甲入。燭之、乃懸於牀後。共解其縊、灌以湯、徐徐而蘇。乙問妻、何苦尋死。妻曰、吾初不知。恍惚有婦人邀我至園中、尋玩片時、見若有圓窗者。令我引領望之。我頭入窗、遂不能出。甲因具道所遇。而乙前妻杳無跡矣。江西堪輿陸在田與甲善。言其事。

(5) 原文は以下のとおり。

『繪鬼畏魄子』『續新齊諧』卷二

海陽邑中劉氏女、夏日在瓜棚下刺繡。薄暮家人鋪蒲席招涼、女忽於座閒顧影絮語。衆怪其誕、呵之。乃大聲曰、唉我豈若女耶。我爲某村某婦。氣忿縊死多年、欲得替人故在此。

語畢大笑、舉帶自勒其頸。闔室盡驚、取米豆厭勝之不退。

乃哀求曰、我女年年爲他人壓金線、取錢易米、家貧可憐。與汝素無冤、幸相捨。不然、天師將至。我當往訴。鬼懼曰、嚇人。嚇人。雖然、我不可以虛返。當思所以送我。衆曰、供香楮何如。不應。曰、加斗酒只雞何如。乃有喜色且頷之。如其言、女果醒。未三日、家人方相慶、女衣袖忽又翩舞、憤語曰、汝等如此薄待我。回想不肯干休。仍須討替。更作惡狀、以帶套頸。衆察其音、不類前鬼。正驚疑間、俄聞瓜棚下綽綽履聲。仍在女口叱曰、鬼婢。冒我姓名、來詐錢鏹。辱沒煞人。亟去。亟去。不然、我將訟汝於城隍神。又勞問女家、勿怕此無賴鬼。我在此、他不敢爲厲。言畢、其女頰暈紅潮、狀若羞縮者。食頃、兩鬼寂然皆退。次日、其女依舊臨鏡。詢其事、杳然如夢。老人李某海陽人。薄暮自邑中還家、覺腰纏重物、解視無有、勉荷而歸。時已月上、家人聞叩扉聲、走相問安、老人瞪目無言、爲設酒脯、亦不食。愈益怪之。既而取布幅許、懸櫟間作縊狀、曰、余縊死鬼也。今與汝翁作交代。衆驚詰以前因。曰、余爲李氏棲泊城中。曾至某家崇其女於瓜棚下。因其家中哀求、我亦念伊女婉弱、是以捨去、別尋替代。奔及城門、有二大人

『子不語』の鬼求代説話の顛末（中野）

(6) 原文は以下のとおり。

『瓜棚下二鬼』『子不語』卷三

司管甚嚴、不敢走過。以此日日受苦、一言難盡。衆家人曰、城門大人既然攔阻、汝今日何能復來。乃嘻嘻笑曰、此實大巧事。今早鄉人以糞桶寄門側、大人者惡其臭也、兩相謂曰、昨宵雨歇、城頭山色當佳。盍一憑眺乎。遂約伴登山去矣。余得乘閒出城。遇汝翁歸、附他腰帶間、蒙其負荷。急於得生、故仍欲相借重耳。衆聞其言軟、似可以情動者、乃哀求曰、翁年老、墓木已拱。你不忍於弱女、寧獨甘心於禿翁。如蒙哀憐、當爲延名僧修法事。令你生天人境界何如。鬼拍手喜曰、我前在瓜棚下、原欲挽彼作此功德、視其家貧、是以勿言。今衆居士既能發大願力、餘又何求。雖然、世人慣作哄鬼伎倆、惟求居士勿忘此言。衆唯唯。鬼卽作頂禮狀。食頃、老人已起索水漿飲矣。翌日廣延僧衆、作七日道場。瓜棚下從此清淨。

浙藩司更夫陳某、喜飲而膽最豪。一夕、巡同垣牆外。時三鼓月甚明。見一婦人年十八九、容貌頗麗。陳念官衙禁地、必無私約者。心知非人、姑戲之、乃往握其腕曰、子夜行、得無覓佳耦乎。我爲若婿何如。婦曰、我非人乃縊鬼也。變其貌甚穢惡。陳曰、我聞鬼皆能改貌。卿卽陋劣、我不嫌也。鬼無奈乃曰、子姑捨我、有錢十五千與子何如。陳問、錢從何得。鬼曰、薦橋某錢莊有女、我明日往學之。子須認我作妹。我教若與子錢十五千、其病卽愈。但子得錢後、我在此勾當一二事、自後母得再阻我。陳諾之。鬼乃去。明日午後、果有人來訪陳、

中國詩文論叢 第二十八集

且曰、汝妹爲鬼太不良。昨日主人女出看戲。歸爲其所祟。百計求解、云必欲尋其兄。來乃去。故招子往。陳乃同往、入門、鬼即在內曰、吾兄至矣。大慟趨出。陳亦佯泣、相抱而慟。已而鬼曰、吾兄貧、無以爲生。汝家富、須予吾兄錢十五千作生計、我當去矣。店主人不得已如數予之、女疾果愈。陳得錢歸、不三日、聞司解中果有婦人縊死者。蓋鬼求代、恐陳阻之、故行賄耳。

『認鬼作妹』『續新齊諧』卷十